

使い込まれた新設博物館

～初めてなのに懐かしい～

米倉 立子

大学博物館の建物

西南学院の創立90周年に当たる2006年5月13日、西南学院大学博物館（ドージャー記念館）が開館した。開館したばかりではあるが、その建物は創立の5年後、当学院に現存するうちでは最も古く、1921年（大正10年）に竣工された赤レンガ3階建ての歴史ある建築である。当館では、この建物こそが最も価値ある資料と位置づけており、まずはその紹介からはじめよう。

設計者は、キリスト教の海外伝道を志し、さまざまな社会活動をこなしながら明治末期から昭和30年代まで長く建築家としても活躍した、アメリカ人ウィリアム・メルル・ヴォーリズ（1880年－1964年）である。彼はキリスト教の伝道活動の拠点として、近江ミッションという組織を立ち上げ、医療・教育・出版などの活動を幅広く展開し、建築設計もその事業の一部門として行った。近江ミッションは、1934年に近江兄弟社と改称したが、その名は塗布薬メンソレータムの日本における販売元であったことが一般的には有名なのではないだろうか。

当館建物は、当時は旧制私立男子中学であった西南学院中学校の本館として建てられ、建設時には生徒や教員らも共に完成に向けてレンガを積むなどしたという彼らの熱意と愛着を伝える記録が写真と共に残っている。その後、2003年3月まで1階は西南学院高等学校・中学校の校長室や事務室等に、2階と3階は講堂として、後年建てられた周辺校舎と連結した形で使われていた。

赤レンガ造りの当館は、「イギリス積み」の変形で、建物四隅の処理が異なる「オランダ積み」工法で構築され、レンガの長い面を外に見せた段と短い面を見せた段が一段おきに交互に積み上げられている。そこにツタが絡まり、緑の葉がレンガに映え、いわゆる「ミッション系」の雰囲気醸し出している。イギリスからアメリカに入植した人々が、イギリスから持ち込んだ建築スタイルをアメリカの風土に合わせて改変したのが、18世紀末から19世紀前半頃に流行したジョージアン・コロニアル・スタイルだが、当館もその様式を踏襲している。正面から見ると、寄棟屋根以下の壁体が方

形に取まり、南面2本の煙突や窓の並びが左右対称であることから、外観は安定感がありながら、リズムも感じさせる。

内部は、床から132cmの高さまで壁面を覆う黒に近い濃茶色の腰板と天井から腰板までの白い漆喰の組み合わせが基調となっており、落ち着いた静謐な空間を作り出している。2階の講堂は吹き抜けとなっており、3階は講堂を見下ろす形でギャラリーが巡らされている。このモノトーンの簡素な空間には、多くの窓から外光が差し込み、思いのほか明るく開放的な雰囲気である。

ヴォーリズは、西南学院のほかにも数々のミッションスクールや教会、YMCAといったキリスト教に関わる建築、さらに商業ビルやオフィスビルも設計し、多様な建築様式や装飾を駆使して、ヴァリエティー豊かな外観や内部空間を構築している。そうした経歴において、なぜ西南学院ではアメリカにおいて入植まもない時期に流行した建築様式を採用し、装飾を抑えながらも明るさを感じさせる建物の構築を目指して設計したのかという点については、本学院がアメリカ南部バプテストの宣教師、C. K. ドージャー（1879年－1933年）によって創立されたこと、そしてドージャーが目指したキリスト教精神に基づく校風などが反映しているのだと思われる。

ヴォーリズは非常に敬虔なクリスチャンであり、当建築の『建築仕様書』（大正9年5月20日作成）の冒頭、「一般ノ約件」の第15項にあるように、日曜日の作業の禁止、工事現場での禁煙禁酒、加えて「野卑ナル談話」の厳禁さえも明示している。こうしたキリスト教的倫理観に裏付けられた厳格な態度は、ヴォーリズの1歳年上のドージャーの精神にも通じるだろう。「日曜日問題」として西南では知られるエピソードが伝えるように、ドージャーは、日曜日は安息日として、他の活動、特に生徒からの再三の許可要求にも拘らずスポーツ部の活動の禁止を繰り返し強く求めた人物である。共に海外伝道の志を持ってアメリカから日本へやってきた2人にとって、多くを語らずともこれだけは譲れないという倫理観を共有し、建築にしろ、教育にしろお互いが求める理想の形を理解しあえたのではないだろうか。

そうした意味では、デザインのコンセプトはヴォーリズやドージャーの考え方、価値観に基づいており、当建築はそれが形として具現化されたものとも見なされよう。しかし同時に、当建築が完成以



ウィリアム・メレル・ヴォーリズ
(1880－1964)

来長きにわたり中学校・高等学校の校舎の一部として使われてきたなかで、その存在を特別視せず時には使い勝手を優先し、徐々に改変が施されていったのは、建物を「使い込んで」いった状況においては仕方のないことだろう。また、磨り減って中央がゆるくくぼんだ階段の段板に見られるように、80年以上も多くの人々が使い込んできたことでしか生まれない時間の積み重ねや、同じ場所に建ち続けてきた空間への愛着や思い出こそが、この建物を味わい深く生きたものになっている。2000年には建築的に貴重であり、長年親しまれたことが評価され、「福岡市都市景観賞」を受賞した。

2003年度から高等学校・中学校は百道浜へ移転することになり、それに伴って周辺校舎は取り壊されることになったが、上記のような経緯もあり、当建築だけはその文化遺産としての価値を認めて残すことになった。そこで、学校校舎という役割を終えたこの建物を、過去を尊重しながらも現代における状況やニーズに合わせ、いかに生まれ変わらせるかが課題となった。

幸いなことにヴォーリズによる設計図や初期の写真などが残されていたので、それらを基に完成当時の形に出来る限り復元して建物の保存を図り、同時に文化遺産と位置づけて広く社会一般に公開することを目指した。さらにその建築空間を生かすため、そして博物館学芸員課程の履修が可能な本学において、図書館と共に大学における研究・教育活動の一拠点とするためにも、これまで教員や図書館が収集・購入してきたキリスト教関連資料を展示する大学博物館として再生させることとなったのである。

復元改修工事のために2003年3月末に調査が始まり、2004年8月から2005年7月までの1年弱に渡って、建物各部の工事が行われた。建物の履歴調査においては、本来天然スレート葺きであった屋根材が、昭和30年代には和瓦葺きに替えられていたり、昭和51年頃行われた改修工事で、雨漏りの原因として煙突3箇所が撤去されていたりしたことも明らかになった。80年以上の雨風やシロアリ被害などに耐えてきた当建築は、随所に激しい傷みがあったようだが、出来るだけ建築部材や使用部品を再利用し、新しく補完する場合も当初の色・形状・素材に合わせて再現を行った。現在では左官職人も少なくなってきた中で、昔ながらの原料調合・工程で広範囲の漆喰を塗り直したり、床下から発見された天然スレートの欠片や古写真を元に、宮城県雄勝産玄昌石天然スレートを用いたスレート葺きに屋根を葺き直したりといった作業が、その最たる事例である。

勿論同時に、博物館として新たに人々や資料を迎え入れるための対策も景観を崩さない範囲で行われた。車椅子に対応できるように東側入口にスロープを設置、建物北東部に1箇所しかなかったトイレを南東部にあった倉庫を改造して2箇所に増やし、一般への開放に備えた。また、各階の消火栓を通常の赤色ではなく、腰板の色と合わ



床下の防音のために使われたというコークス（石炭殻）

のように、1階の壁面と2階講堂の床面に建物のレンガや防音用に床下に敷かれたコークスが見える覗き窓を設置する工夫も行った。

2004年には「福岡市指定有形文化財」、「保存建築物」に指定され、文化遺産としての位置づけが明確になった。その指定理由には、大正期に完成した福岡市内で数少ない現存するレンガ造の建築物であることやデザインの美しさ、さらに1923年（大正12年）の関東大震災を境に耐震性の問題からレンガ建築が造られなくなっていく中で、本建築が日本の近代以降におけるレンガ建築の成熟期の作例に当たり、完成度が高いことなどが上げられている。

2005年3月20日におきた福岡県西方沖地震の際は、西新地区でも震度6弱が記録されたが、建物構造体の補強工事が大分進んでいたことが幸いし、部分的な損壊のみで建物本体は無事であった。

そしてようやく2006年5月に博物館という新しい役割を担って、再び人々を迎え入れる「機能している建物」となったのである。公的な空間では殊更にユニヴァーサル・デザインが求められる現代において、この本来博物館たることを意図していなかった建物の佇まいを生かしながらの展示の試みには多くの困難が伴い、「デザイン・機能の先端性」や「使い勝手の良さ」とは無縁である。しかしながら、新設館には得がたい使い込まれた時間が生む、「なんとなく落ち着く居心地の良さ」を来館者には感じただけなのではないか。館内に足を踏み入れる方々が、少しずつ不便や不都合を分かち合い、建物の良さを感じていただければ、そのこと自体が、各々が取り立てて自覚的ではなくとも古い建物を大事に使い続ける行為への参加者・支援者になれるという関係性が成立しよう。



くぼんだ階段に歴史の重みを感じられる

現在、当館は大学博物館という性質から、大学の教育・研究の一拠点として、また大学と地域社会とを繋ぐ開かれた窓としての役割も担うことを目的としている。当館の位置する東キャンパスは、両隣のカフェテリアやホール・茶室等を備えたコミュニケーションセンターなどと共に地域の人々も取り込み、大学活動の活性化と情報の発信を目指したスペースである。これら東キャンパスの建物は、当館に合わせて赤レンガの外観で視覚的にも統一されており、一帯が「赤レンガの西南学院大学」という「イメージキャラクター」的な役割を担った存在として広く人々に親しまれる場所となることを願っている。

展示品の紹介・当館が目指すかたち

当館では、小規模ではあるが、世界や日本のキリスト教の、またキリスト教の母胎となったユダヤ教の歴史・文化を伝える資料と学院創立者 C. K. ドージャー所縁の品などの学院史資料を展示している。キリスト教主義に基づいた大学の博物館として「教科書や聖書で名前は知っていても、その姿はイメージしづらい」といったものの形や色、大きさを確認し、理解を深める場を提供することを主な目的のひとつとし、年表パネルや海外で所蔵されている資料の複製品も含めて展示している。

現在の当館の資料は、それぞれの稀少的価値という点では弱いが、旧約時代と新約以降宗教改革までをまとめた年表パネルや紀元前2000年から昨年2006年の当館開館までを凝縮した映像などは、普段の生活では漠然とした認識で済ませているキリスト教の歴史を改めて概観する機会を提供し、聖書展示コーナーでは世界各地の博物館等に所蔵された稀少資料を複製品とはいえ隣り合わせに比較することも可能である。また、パレスティナで生まれたユダヤ教・キリスト教が成立していく歴史的・文化的背景や自然環境を理解するために、洪水物語の粘土板やメシヤ碑文といった聖書外資料、さらには植物の種なども展示している。日本の資料では、キリストの磔刑像が浮かび上

がる魔鏡、禁教の徹底と潜伏した信者のあぶり出しを意図した通達を記した制札、初期の和訳聖書等を展示している。

キリスト教関連資料が主な展示資料というあまり興味がわかないという向きもあるかもしれないが、歴史や地理、美術や文化といった様々な観点で、観者がそれぞれの興味からアプローチできる間口の広い展示を今後は目指していきたい。その意味では、西南学院中学校・高等学校の卒業生達が当館の2階講堂に久しぶりに足を踏み入れたことで触発されて、自分でも忘れていたようなかつての思い出を思い起こし、学院史関連資料を見ながら懐かしい思いに浸るといったことは、各人それぞれのアプローチのひとつであろう。

キリスト教関連資料をテーマとする展示という中心軸は、当館の特色としてぶれずに発信し続けると同時に、在校生でも卒業生でもなく、キリスト教に特別な関心・接点を持っているわけでもない人々をどう取り込んでいくかは今後の課題のひとつでもある。

まだ収蔵品も少ないが、今後はこれまで「周縁」としてスポットを浴びてこなかった地域のキリスト教資料やユダヤ教資料に焦点を当てた収集・研究・展示活動を進めていく所存である。2階講堂や現学芸員室を展示室として活用するための準備も進めているところであり、展示スペースを拡充することで可能となる新たな企画を着実に実現していきたい。さらに多様な専門分野から講師を招いて定期的に講演会を行ったり、音楽や映像などを積極的に取り込んだイベントを行ったりすることで、2階講堂や3階ギャラリーの活用を促進していかねばならないだろう。

大学博物館ならではの特性として、直接の営利的効果の有無には左右されず、マイナーに思われる分野の開拓や大学における研究・教育との連携を図った活動の継続が独自カラーを確立していくための端緒であり、それこそ開館して日が浅く小規模な当館が存在を根付かせるために必要な地道な過程であろう。それが副次的には当館ならびに西南学院大学の教育や研究に対する、また大学と社会との連携に対する姿勢として、内外にアピールする力にもなっていくのではないだろうか。

(この原稿は、思文閣出版^{おとうとう}『鴨東通信』2006年7月号掲載の拙稿「史料探訪25 西南学院校舎から大学博物館へ…文化遺産としての建築の再生」を基に、『西南学院旧本館・講堂改修工事報告書』なども参照した上で、加筆・改稿したものである。)